

沖縄現代史研究の同時代史
——今日における対抗的歴史叙述の可能性——
戸邊 秀明（東京経済大学）

1. 課題設定

本分科会の主題については、現在、鹿野政直『沖縄の戦後思想を考える』（岩波書店、2011年）のような体系的な著作もあり、反復帰論や戦後沖縄文学の作家研究など、個別の蓄積も少なくない。ここでは、それらの知見を列挙・概観するのではなく、地上戦と軍事占領の体験を思想化する営為は、いまどのような表現として可能なのかという問いに、沖縄現代史研究における近年の歴史叙述を通じて答えることを主眼とする。

戦後沖縄の何を「思想」と捉え、何を評価し批判するかは、常にその時々の沖縄と日本／世界との関係に規定される。沖縄現代史の研究が実証面で格段に進んだこの20年余りは、同時に、沖縄の歴史意識が大きなゆらぎを見せた時代でもあった。そのため、研究は状況に対峙するなかで新たな歴史像を描いてきた。そうした戦後沖縄像の現在から、今日あらためてつかみ取るべき「戦後沖縄の思想」を望見することで、課題に迫ってみたい。

2. 前提：現代沖縄の歴史意識の振幅と日本社会

1995年以降、沖縄で再び盛んとなった反基地・反占領の声に対して、日米両国家と日本社会による封じ込めの体制が作られてきた。閉塞する沖縄では、2000年の「沖縄イニシアティブ」のように、新自由主義的な歴史意識を背景とした体制への過剰同調も現れた。他方、近年の日本国家による沖縄戦教科書検定や新基地建設強行、さらには日本社会の対沖縄ヘイトスピーチに煽られるかたちで、沖縄では独立論やそれを支持する意見が発言力を増しており、対日本を意識した新たな歴史意識も見られる。このように20年余り、沖縄の歴史意識は表面上、大きな振幅を描いてきたが、それは日本ナショナリズムの急激な変貌への対応を余儀なくされた姿でもある。

これに対して、沖縄戦研究の深化から見えてくるのは、そのような対関係のなかで昂進する歴史意識を相対化する視点を、地上戦以後の沖縄が獲得してきた歴史である。報告の前半では、報告者の既発表論考での知見をふまえて歴史意識の振幅の見取図を示し、それを超える視座を沖縄戦研究にそくして指摘する。

3. 考察：1995年以後の沖縄現代史研究の展開と転回——占領初期／冷戦初期の歴史像を事例に

後半ではより具体的に、近年その成果を公刊した3人の沖縄現代史研究者（若林千代、森宣雄、鳥山淳）の歴史叙述とその特徴について検討する。いずれも、研究の出版期に1995年以降の沖縄の声に向きあうことになり、歴史叙述の転回を自覚的に進めた歴史家である。1995年以後の状況は、基地問題の根源である占領初期（1945～50年代）の捉え直しを迫った。それによく応えた歴史叙述として、この3人の作品を

読み解いてみたい。

3人の研究は、沖縄の民衆運動の渦中で歴史的視座を培った国場幸太郎—新崎盛暉の知的系譜に深く学びつつ、近年の沖縄現代史研究の主潮流を批判する位置に立ち続けている。あえて図式化すれば、①帰属論やアイデンティティに関心を集中させる国民国家論的歴史像と、②既存の政治観を前提とした政治外交史的歴史像の双方にむかって、新たな政治社会史の叙述を対置してきたと言いうるだろう。そこには、これまで自明視されてきた戦後沖縄像や思想観を問いに付し、過去の民衆の経験を沖縄の現在に接続させようとする視角もうかがえる。

報告では、今日、より若い世代による同時代史叙述にも影響を与えている彼らの方法と態度を、実際の叙述を示してつかみ取り、そこに、戦後沖縄の経験を思想化するいかなる可能性が生まれているのかを探っていく。それにより、歴史研究が、状況に直接介入するのとは異なったかたちで、しかしより根源的な水準から、過去を描き直すことで現在を相対化する視圏を開示できる例を示せばと考えている。

4. 展望と課題

最後に、以上の分析を前提として、「戦後沖縄の思想」をより深めるために必要な視点、特に移民史研究などの越境的領域や琉球弧の歴史の複数性をふまえた歴史像の提示と叙述の革新という課題を提起して、結びにかえる。

なお、報告の前提となる既発表論文は以下の通りである。

- ①「現代沖縄民衆の歴史意識と主体性」（『歴史評論』第758号、歴史科学協議会、2013年6月）
- ②「沖縄の自己認識の変貌と日本社会」（『同時代史学会 News Letter』第26号、同時代史学会、2015年5月）
- ③「沖縄戦の記憶が今日によびかけるもの」（成田龍一ほか編『記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争——岩波講座アジア・太平洋戦争 戦後篇』、岩波書店、2015年）